

財団法人

住吉隣保館ニュース

No. 1

■編集・発行 財団法人住吉隣保館
 ■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21
 TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

この号の内容

- 1 発行にあたって(1)
- 2 市民交流センターすみよし北
特別事業『住吉さんの1800
年と地域の文化』(1)～(5)
- 3 理事長あいさつ(6)
- 4 お知らせ(6)

発行にあたって

今年、1961（昭和36）年に財団法人住吉隣保館が設立されて50年、その設立と部落解放運動の地元支部の創立に中心的な役割を果たした故住田利雄さん生誕100年に当たります。この節目の年に、財団設立の精神であった住民の生活と人権をまもり、人々のつながりに支えられたコミュニティ（地域社会）をつくりあげるための活動を強めていきたいと思っています。そのための一助に2011（平成23）年度から「財団法人住吉隣保館ニュース」を発行します。

市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

住吉さんの1800年と地域の文化

講師 上田正昭さん（京都大学名誉教授、世界人権問題研究センター理事長）

4月16日13時30分から、2011年度の大阪市市民交流センターすみよし北の特別事業「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」のスタートにあたり、「住吉さんの1800年と地域の文化」と題して、上田正昭京都大学名誉教授・世界人権問題研究センター理事長の講演が行われた。小住光市民交流センターすみよし北館長が司会をし、講演に先立って友永健三財団法人住吉隣保館理事長から挨拶があった。

史料をかみ砕き、白板を使って出来るだけわかりやすく話して下さる上田先生の講演に、265人の参加者は熱心に聞き入った。講演終了後も質問の手がたくさんあがったが、それにも丁寧に答えていただいた。

休憩後、第2部として住吉踊り保存講演会による「住吉踊り」の披露があった。以下に講演の要旨を記すとともに質疑応答の一部を紹介する。（文責：事務局）

住吉大社の祭神

大社鎮座1800年という意義深い年に住吉の地域の皆さんがこのような講座をもたれることに心から敬意を表します。今日は、住吉大神と地域文化との関わりあい、そして民衆の観点から住吉の歴史を考え、更に東アジアの中の住吉さんを考えてみたいと思っています。全国各地の住吉社の総本社住吉が、大阪の皆さんが住吉さんと親しむ住吉大社です。

住吉大社に関する最も基本的な文献は『住吉大社神代記』です。いつ書かれたものかについては、聖武天皇の天平三年(731)・桓武天皇の延暦八年(789)という説もありますが、私は坂本太郎東洋大学名誉教授の考証された元慶三年(879)を少し下った時期という説を支持しています。その史料には神殿が第一宮から第四宮まであり、その祭

神が第一宮は表筒男^{うわつつのお}、第二宮は中筒男^{なかつつのお}、第三宮は底筒男^{そこつつのお}そして、第四宮は姫神宮とあり祭神は氣息帯長足姫皇后^{おきながたらしひめ}(いわゆる神功皇后)です。表筒男のウハは表面をツツは津之(港の)ということで、港は住吉の港のことです。また、男は男神のことです。現在の第一本宮です。そして注に4つの社を奉齋するのが津守宿禰^{つものすくね たもみのすくね}(手搓見足尼の子孫)であると書いてあります。此の津守氏の姓^{かばね}は天武天皇の時代に連^{むらじ}から宿禰に変わっています。

西向きに建てられた神殿

今日も住吉大社にお参りしましたが、お参りする度に第一本宮・第二本宮・第三本宮が西を向いており明らかに大阪湾の方向に向いており、第三本宮の南に第四本宮があるという配置に感銘しています。「天子南面」の思想が伝わると宮殿は南向きに建てられます。飛鳥の宮殿が南面して建てられているように、南北軸が大切なのです。平城宮の宮殿も南向きに建てられ、長岡京・平安京の宮殿も南北軸です。ところで住吉大社は東西軸です。西から東を拝む形になっています。桜井市の纏向遺跡^{まきむく}の調査で大変重要な遺跡が発掘され、現地にも行きました。3世紀前半、ちょうど邪馬台国卑弥呼の時代のおそらく宮殿の跡ではないかと思っています。卑弥呼の宮殿かどうかはなお検証が必要ですが、現在発見されているものの中で一番大きい南北 19.2m・東西 12.9m の高床の建物(D)が見つかりましたが、これは吉野ヶ里遺跡で見ついている最大の高床の建物の 1.5 倍になります。この大きい高床の建物を中心に建物が(A)・(B)・(C)・(D)と四棟東西に並んでおり、古代の建築が東西軸で建てられたということを確認できました。

春日大社の現在の本殿は南面して建てられています。建てられたのは、神護景雲 2 年(768)と分かっています。天平勝宝八年(756)に描かれた東大寺正倉院所蔵の絵図(「東大寺山界四至図」)では春日大社は「神地」と長方形で描かれ、春日山を西から東を拝む西向きの聖なる神地として描かれています。そして、発掘調査の結果、この図面と

全く同じ場所から八世紀前半のころの築地跡や瓦が見つかりました。春日大社も古くは西から東を拝む東西軸であり、纏向遺跡は中国の「天子南面」の思想が伝わる以前の伝統的な日本の建物配置のありかたを示唆していると考えています。そういう意味で住吉大社が東から西へと西を向いて神殿が建てられているのは意味深いと思っています。

記・紀に登場する住吉大神

難波の港・難波津が大阪湾の表玄関になるのは天武六年(677)に摂津職^{しき}が設けられたころからです。摂津職というのは、「津(港)を摂る(とる)」つまり難波の港を管理する役所です。それ以前は住吉の津が大阪湾の玄関でした。そこに表筒男・中筒男・底筒男の三神を中心とする住吉大神の社が鎮座することは、大社が大阪湾の地域の海民(海の民)の守り神として存在したことを物語っています。従って住吉の大神を守る氏族の名前も住吉の津(港)を守る津守連であり、港を管理する人々が住吉の大神を祀っているということになります。やがて、こうした海の民の守り神であった住吉の大神はやがて朝廷の尊崇を受け国家の神として重要な役割を担うようになります。

『古事記』は和銅五年(712)の一月二十八日に、元明天皇に献上されていますので、来年は古事記 1300 年になり、多くの催しが計画されています。この『古事記』には男神イザナキが、火の神を生んで亡くなった女神イザナミを慕って黄泉の国へ行き、黄泉の国から戻ったイザナキが死のケガレ(気枯れ)を落とすために禊ぎをした際に、天照大神をはじめ多くの神々が誕生したことが書かれています。水底で身を滌いだ時に底津綿津見神^{そこつつわたつみのかみ}・底筒之男命^{そこつつのおのみこと}が、中程で滌いだ時に中津綿津見神^{なかつわたつみのかみ}・中筒男之命^{なかつおのみこと}が、水面の表で滌いだ時に上津綿津見神^{かみつわたつみのかみ}・上筒之男命^{うはつつおのみこと}が生まれ、この底筒之男命・中筒男之命・上底筒之男命三柱の神が墨江^{すみえ}の三座の大神であると書いてあります。そして、三柱の綿津見神は阿曇連^{あづみむらじ}らが親神(祖先神)としてもち齊く(仕える)神であると興味深いことが書か

れています。阿曇連^{あづみのむらじ}は漁民で、その祖先の神としてが綿津見神^{わたつみのかみ}が祀られているというわけです。

日本の神はキリスト教やユダヤ教、イスラム教の神と違い、あらゆるものにカミを見いだし、海には海の神、山には山の神がいるというように信じてきました。本居宣長が古事記研究の最も基本になる『古事記伝』の第三巻で、古典に見える神、国々の社^{むら}に祀られている神、鳥・獣・樹・草その他何であれ、「世の常ならず(尋常でなく)徳がありて畏きもの」を神という、と神を定義しています。これはすばらしい定義だと思います。日本の神は八百万の神であり多神教であるという宗教学者がいますが、私はあらゆるものに神を見いだす汎神教^{はんしんきょう}であると思っています。綿津見神^{わたつみのかみ}のワタは朝鮮語の海(パタ)から来てることは間違いなく、その海の神が漁民である阿曇連^{あづみのむらじ}の祖先の神様であると書いており、漁民が海の神様を祖先神として祀っていることを示しています。住吉の神についても港を守る海民のリーダーの津守連が海の守護神である表筒男ら三神を祀っていることが分かります。

養老四年(720)の五月二十一日に奏上された『日本書紀』にも住吉三神のことが書かれています。記・紀(『古事記』と『日本書紀』)と言われますが、その記述されている内容には違うところが多くあります。例えば、分量は『日本書紀』の方が多いのですが『古事記』には267神、『日本書紀』には181神が登場します。また住吉大社は辛卯の卯日に創建されたと伝えられており、兎とのゆかりもありますが、有名な因幡の白兎の話は、『古事記』に



しかありません。また、黄泉の国の神話は『日本書紀』では本文にはなく一書(別伝)の中にしか出

てきません。その「一書」にイザナキが海底に沈んで身を濯いで底筒男命が、潮の中に沈んで濯ぎ中筒男命が、潮の上に浮き濯いで表筒男命が生まれ、この三神が即ち住吉大神であり、奉齋したのは津守連であるとあります。嵯峨天皇の弘仁六年(815)に完成した『新撰姓氏録』には、山城・大和・摂津・河内・和泉の1182氏族の祖先の伝承が記されています。その中に依羅^{いゑ}の津守連が出てきます。『日本書紀』の仁徳天皇四十三年九月の条に依羅の阿珥古^{あゑこ}という人物が出てきますが、今、東住吉区に我孫子町^{あまのこ}があります。依羅の津守連として登場する津守連は我孫子町あたりから、松原市までを勢力範囲にとし、その背景は大阪湾を生活の舞台にする海の民であったことが『新撰姓氏録』から分かります。

アジア外交での住吉大社の役割

海の守り神・港の守り神は同時に外交の上でも重要な役割を果たすことになります。遣唐使は舒明天皇二年(630)から承和五年(838)まで17回計画され、うち15回入唐しています。うち迎入唐使(国書を持たずに帰ってこれない遣唐使を迎えに行く)と送唐客使(唐の使いを送っていく)を除けば正式の遣唐使は12回ということになります。これに、住吉の神主が随行していることが『住吉大社神代記』・『日本書紀』などから分かります。遣唐使も6回までの前期と7回以降の後期とでは性格が非常に違います。653年の2回目に続き654年に3回目が派遣されるなど前期は短期間に繰り返し派遣されているのに対し、後期はおおむね20年長い場合は30年の間隔で派遣されています。なぜか、東アジアの動きの中で考えなければ遣唐使の問題も、随行した住吉大社の神主津守連の役割も分かりません。唐の高宗^{えいこう}が永徽二年(651)に新羅を助けて、先ず百済を、続いて高句麗を滅ぼすという、当時対立していた朝鮮三国に対する重要な政策を出している事が『新唐書』から分かります。この情報に慌てた倭国は653年・654年・659年・665年と相次いで遣唐使を送っています。事実660年に百済が滅び、復興を応援した倭

国の軍隊は663年白村江^{はくそんこう}の戦いで大敗北を喫します。そして、668年には高句麗が滅ぼされます。前期の遣唐使は朝鮮半島の支配をめぐる、極めて政治的目的を加えて行っていると言え、後期の遣唐使は、安定的で文化の導入に主目的があったと言えます。

遣唐使と並んで大事なのは遣渤海^{ほつかい}使です。神亀五年(728)から弘仁二年(811)まで15回使節が行き、渤海からは34回来ています。唐からの使節が9回(正式に国書を持参したのは8回)です。また、新羅からの使節・新羅への使節は渤海の場合よりはるかい多い。遣唐使だけで古代の東アジアの外交を論じては不十分です。高校の教科書に遣渤海使が書かれないことは残念ですし、国際的なシンポジウムなどで遣唐使ばかりが話されるのは間違いです。遣渤海使にも津守の神主は同行していました。そうした例は『魏書』(『魏志』)の倭人の条の「持衰^{しきさい}」にもうかがえます。

『万葉集』の遣唐使を歌った歌に、住吉の神が守り神として歌われ、遣唐使が住吉の港から船出することが歌われています。この船出の歌に、「日の入る国」と中国を呼んでいます。推古天皇十五年(607)に聖徳太子が国書を送り「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す、恙なきや」と書いてあったので隋の煬帝が激怒したと『隋書』にあります。これは、よく言われるように中国を「日没する処」と呼んだから激怒したのではなく、東夷(東のエビス)の倭国が「天子」を名乗ったことに激怒したのです。

「アラヒトガミ」と歌われた住吉大神

『万葉集』の歌を見るにつけ、思い出すことがあります。昭和十七年(1942)満洲国が建国され十周年となりました。当時文学関係者も戦争に協力するという事になって組織された文学報国会の久米正雄事務局長が、新聞に満洲国皇帝溥儀を「アラヒトガミ」と書き大問題となりました。天皇のみが使う「アラヒトガミ」を満洲国皇帝に使うとは「不敬」であると軍部も警察も久米正雄を弾劾しました。その文学報国会の理事であった、私の恩師の

一人でもある折口信夫先生が、ひとり弁護にたたれ、『万葉集』のこの歌を引用して、天皇だけを「アラヒトガミ」というのではない、住吉の大神を現人神と歌っていると擁護されました。

ついでに言えば『日本書紀』の雄略天皇四年二月の条に奈良県御所市に祀られている葛城の一言主神^{ひとことぬし}(地元でいちごんさんと親しまれている)が『日本書紀』では「我は現人之神ぞ」と言って現れる例があります。

折口信夫先生は大阪府西成郡木津村の出身で優れた国文学者であり、柳田国男先生の第一の高弟で優れた民俗学者であり、歌人・作家釈道空としても有名です。

渡来人も尊崇した住吉大神

『新撰姓氏録』によれば、日本の表玄関でもあった住吉津・難波津があったので朝鮮半島などから撰津国に29、河内国に56、和泉国に30、計115の渡来の氏族が住みついています。『新撰姓氏録』には撰津国に朝鮮半島から移り住み漁業を営む韓海部^{からのあまのおびと}首という氏族がいることが分かります。『日本書紀』の仁賢天皇六年是秋条にも韓白水郎^{からのばくすいろう}とあります。白水郎とは海部のことです。これらの人達も住吉の神を海の守り神として仰いだことは十分想像出来ます。

国家の神として住吉の神が果たされた役割は大きいのですが、民衆の神、地域の守り神、特に海民の守り神として果たされた役割、そして、アジアの外交に活躍された役割は大きい。大阪湾には朝鮮半島から来た人々が数多く住んでいたことを思い出して頂きたいという事を中心にお話しました。

質疑応答

Q1.筒の三神についてお聞きしたい。海神三神・宗像三神ということもあるがこの「三」という数字に氏族の伝承といった意味、いわれがあるのでしょうか。

A 陰陽五行では、奇数の3・5・7は 聖なる数字ですが、この場合の「三」はそういう意味はありません。

Q2神功皇后の実在性を否定すると住吉大社の鎮座などに関わってきますが、神功皇后の実在性について如何お考えでしょう。

A 神功皇后は『記』・『紀』には「氣息帯長足姫」という名前です。神功という唐風の諡は奈良時代の漢詩集『懷風藻』が初出です。息長のすぐれた女人の伝承が核で、詳しくは講談社の学術文庫『古代日本の女帝』に書いていますが「神功皇后の三韓征伐」というような話はでたらめです。『古事記』では氣息帯長足姫は新羅を攻めるのであって、百済・高句麗を攻める話が出て来ません。『日本書紀』では新羅を攻めるが、新羅王・百済王は降伏を誓っています。しかしそういう史実はありません。また、「三韓征伐」という言葉がいつから使われ始めたのかについては学生社『和魂!!めざめよ!』で詳述していますが、鎌倉時代の初めの『竈門山宝満大菩薩記』が初出です

Q3住吉大社が東西軸で建てられているということでしたが、これは太陽信仰と関係あるのではないのでしょうか。

A 神様は太陽の登る方から神奈備(神体山)に降りてこられるという太陽信仰と関係があります。『万葉集』に藤原の三井(御井)の歌(藤原宮の井戸の歌)があります。その歌にも太陽が登る東西軸「日の経」が歌われています。東西軸は日本人の古からの信仰の反映で、太陽信仰と関係していると思います。質問の方と同感です。

Q4先生の著作に日本にも中国の中華思想に似た思想があったと書かれていたように記憶していますが、偏見といったものがあったようですが、過去の歴史を踏まえて今後の近隣諸国とのつきあい方について先生のお考えをお聞かせ下さい。

A 福沢諭吉が明治十四年から「脱亜論」を書きません。遅れたアジアを軽視し欧米を指向する「脱亜入欧」という考え方のようなものが古代にもありました。律(刑法)・令(行政法や民法など)によって支配する体制が出来たのは七世紀後半から八世

記初め天武・持統天皇・文武天皇の頃です。日本は中国から見れば東のエビス(東夷)ですが、当時の日本の支配者は東夷の中の中華であると考えています。公文書を規定する公式令のなかに隣国とあるのは大唐(中国)で、新羅・渤海は蕃国(朝貢国)とあり、朝貢する国として下に見ています。1965年に中央公論社から『帰化人』を出し帰化という言葉を用意に使うべきでないとして論じました。『古事記』『風土記』には帰化の語ではなく渡来という表現です。「大宝令」の規定でも帰化とは日本のなかに本居を定め戸籍に登録されたことです。庚寅戸籍(持統五年・691)以前に戸籍はないので弥生時代・古墳時代などに帰化人は存在しません。『日本書紀』には13箇所(百済・新羅・高句麗の人に10例・屋久島の人に2例・普通名詞として1例)出てきますが、中国人に使われた例は1例も無く、帰化という言葉自体が中華思想の現れといえます。

最初「渡来」という言葉は上田の造語と文部省に批判されましたが、現在の教科書は「帰化」は「渡来」に変わりました。

Q5住吉さんは海の神様であると同時に歌の神さまといわれますが、どう繋がるのでしょうか

A『万葉集』をはじめ住吉はしばしば歌われていて、住吉の神様が芸能、特に歌との関わりが深いと平安時代から言われるようになったのではないかと思います。このあと文学の講座もあるようですので、その折りにお尋ね下さい。



[上田先生の講演会の後に披露された、住吉踊保存後援会による住吉踊り]

理事長あいさつ

皆さん、こんにちは。ただいま紹介をいただきました財団法人住吉隣保館の理事長の友永健三です。

昨年4月に、この市民交流センターすみよし北の管理運営を当財団が中心になって大阪市から受託いたしました。早一年が経過しました。

おかげさまで、この一年間160に及ぶ団体にこのセンターをご利用いただきましたし、センター利用者友の会には60団体が参加をいただいています。

その内容も、歴史や文学などの講座、民謡や太鼓演奏などの文化活動、識字活動やパソコン講座、中国語や韓国語の講座、マッサージや手作りみそ造りの講座など実に多種多様な活動に及んでいます。

このセンターの設置目的は、①多世代交流の促進、②コミュニティ活動支援、③市民活動支援、④市民に活動の場を提供することにあります。この目的にかなりの程度こたえられたのではないかと考えています。



このセンターを活用して取り組まれております講座には、利用者の皆さんが主体的に開催されるものと、当センターと利用者の団体とが協力して実施する共催

事業とがございます。

本年は、このセンターが所在しています住吉区にあります住吉大社が1800年の歴史を迎えるということで、この機会にこの住吉区を中心とした地域の歴史や文化を様々な角度から見つめなおす講座を共催事業として実施することといたしました。

このため、本年1月、住吉区、大阪市立大学、住吉大社、財団法人住吉村常磐会、連合町会、NPO法人かなえ会などと市民交流センターすみよし北、そして当財団が実行委員会を立ち上げ、「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」講座と展示会を一年間を通して開催することといたしました。

本日は、そのスタートを飾る特別講座として、京都大学名誉教授で、財団法人世界人権問題研究センター理事長の上田正昭先生をお招きし「住吉さんの1800年と地域の文化」と題したお話をいただくこととなりました。

私ごとになりますが、上田先生は、1968年8月に部落解放研究所が創立され、その職員として働き始めました直後からいろいろとお教をいただいている先生です。先生からお教をいただいたことは少なくありませんが、歴史を学ぶ視点として、①支配者の立場だけからみるのではなく民衆の立場からもみること、②中央からだけ歴史をみるのではなく地域からも見ていくこと、③日本国内だけからみていくのではなくア

ジアとの関係からもみていくことが重要だとの指摘は、きわめて重要な教えだと思っています。

本日の先生のお話も、この観点から学ぶことの多いものと楽しみにいたしております。

おわりに、今年一年間開催します「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」講座と展示会にも皆様方の積極的なご参加をいただきますとともに、このセンターを積極的にご利用下さいますことをお願いし、主催代表のご挨拶といたします。

2011（平成23）年4月16日

財団法人住吉隣保館理事長 友永健三

お知らせ

①今後の「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の予定

第1回(5月11日) 13:30~15:30(以下、時間は同じ)

「住吉と萬葉集~その後の和歌の世界にふれて」

講師:村田正博さん(大阪市立大学文学部教授)

第2回(6月8日)

「地名に隠された住吉の歴史」

講師:小出英詞さん(住吉大社権禰宣)

第3回(7月13日)

「邪馬台国時代の住吉~1800年前の痕跡をさぐる」

講師:京嶋覚さん((財)博物館協会・大阪文化財研究所学芸員)

第4回(8月10日)

「中世の住吉~住吉社神主津守氏と住吉社の発展」

講師:生駒孝臣さん(大阪市史料調査会調査員)

参加申込 電話:06-6674-3731

②住吉地区の暮らしとまちづくりのパネル展

~故大川恵美子さんの生きざまを通して~

部落差別解消と生活環境改善に取り組んだ、女性活動家の絵画から、コミュニティづくりに女性が果たす役割について示唆を与えてくれます。

(期間中は、ビデオ上映もおこないます)

期間: 2011年5月1日~6月12日

時間: 9時30分~21時30分

主催: 市民交流センターすみよし北

場所: 市民交流センターすみよし北1階ホール他

問合せ 電話:06-6674-3731

③財団法人住吉隣保館の学習会のご案内

財団50年の歩みの取りまとめと、これまでの住吉地区の実態調査に関する研究報告を中心に学習会をおこないます。

日時: 2011年5月25日(水)夜7時~

場所: 市民交流センターすみよし北4階402室

内容: 財団50年の歩みとこれまでの住吉地区実態調査

報告者: 川口隆男さん(地元精通者)

矢野亮さん(地元精通者)

参加申込 電話 06-6674-3732